



竹岡雄二 《立っている彫刻Ⅱ》1989年／個人蔵／撮影：椎木静寧

「竹岡雄二 台座から空間へ」を振り返る

本年は7月9日から9月4日にかけて、特別展「竹岡雄二 台座から空間へ Yuji Takeoka From a Pedestal into Space」を開催した。遠山記念館としては、2000年の「ジェームス・リー・バイヤーズ展」、2009年の「長澤秀俊展 夢うつつの庭」に続く、3回目の現代美術展の試みとなる。

今回の展覧会の特徴は、埼玉県立近代美術館との共同開催であったという点にある。本年1月から3月にかけては、同じタイトルの展覧会が、大阪にある国立国際美術館においても開催された。その出品作品を埼玉県に巡回させる際、大部分を埼玉県立近代美術館へ、そして6点を遠山邸の近代和風建築に展示するという、二本立ての展示とした。先行する国立国際美術館での開催時にはなかった作品も展示されるため、見比べるために関西から来館された方も多く見受けられた。52日間の開館期間には、酷暑の日も多かったものの、総計8705人のご来館をいただいた。これは埼玉県立近代美術館と両会場を合わせたべ人数である。

さて、本展で取り上げた竹岡雄二は、1946年に京都で生まれている。京都市立芸術大学を卒業後、ドイツのデュッセルドルフ国立美術大学へと留学し、その後は半世紀近くドイツを拠点に制作活動をしてきた。竹岡の表現活動を代表するのが、「台座彫刻」とも呼ばれる一連のシリーズである。台座とは、そ

の上に置かれる彫刻、あるいは工芸品の価値を視覚的に強調する、一種の展示装置である。美術史の用語においては、「エルゴン(作品)」に対する「パレロゴン(付随物)」として位置づけられる。しかし結果論的に言えば、台座はその上の物体を自動的に作品にしてしまう、そうした機能を担うことになった。その台座を自立した作品として提示することで、逆に鑑賞者に作品の不在性を意識させ、ものを見ること、そして展示空間とは何なのかを、竹岡は問いかけるのである。

このように、竹岡の制作は、「空間呈示」というキーワードから読み解くことができる。逆に言えば、竹岡の制作物は、それ単独では作品とならず、設置され空間と結びつくことによって、初めて作品として成立する。その竹岡が、遠山邸という、特異な情報密度をもった空間を相手に、どのように展示を行うのか、それがこの遠山記念館での見どころであった。

本展を視覚的に象徴する作品となったのが、《ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインのための台座》である。人造大理石を素材とした台座彫刻で、ウィーンにあるヴィトゲンシュタイン・ハウス(現ブルガリア文化研究所)の建物の形状の一部を造型に取り入れている。マットな質感とストイックな形態感により、独自の存在感をもった作品である。国立国際美術館においても、ポスター、チラシにおけるメインヴィジュアルとなったが、グレーのカーペットに白バックという、美術業界で「ホワイトキューブ」

と呼ばれる、中立的な空間で撮影されていた。

竹岡はこの作品を、遠山邸東棟にある、囲炉裏のある居間に設置した。規則的な建具の棧、スクウェアな区画を構築する縁なし畳の中であって、作品の微妙なカーブが作品の存在感を強める効果を生んでいる。また人造大理石の、白く清潔感のある質感が、歳月を経た古畳と好対照を生み出す結果となった。これにより、国立国際美術館とは違う作品であるかのような、劇的な変化がもたらされたのである。



竹岡雄二《ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの台座》

2015年／作家蔵／撮影：椎木静寧

学芸員の立場として印象的な展示となった作品が、下に掲載した《展見^{てんみ}》である。これは金メッキをした金属板をガラスケースに入れるという作品である。やはり美術館における展示装置の一つであるガラスケースを、自立した作品として提示しようとした、竹岡ならではの着想による。竹岡はこの《展見》を、東棟内玄関の土間に設置した。遠山邸の見せ場の一つ、左官による人造石研ぎ出しの技法を用いた亀甲形の連なる土間が、このガラス面に移りこむことで、予想外の視覚効果をもたらした。さらに障子を透かし、上から降り注ぐ外光は、時間ごとに作品の表情を変えさせていく。美術館という文脈から外されることで、作品が竹岡の意図から自立し、さらに別の表現へと変質したかのようであった。



竹岡雄二《展見》

1988年／個人蔵／撮影：椎木静寧

本誌表紙に掲載した《立っている彫刻Ⅱ》は、ベルギー産のブルーストーンを素材とした彫刻作品である。直方体の四面に線状痕が入るという極めてシンプルなこの作品を、竹岡は庭園に自立させた。伏せ石の多い書院庭園に、垂直性を強調した立体物が加わることで、庭園の空間を変質させようとしたのである。現在の遠山邸書院庭園は、彫刻家の流政之により組み替えられたものである。奇しくも二人の彫

刻家による、合作の空間が提示された結果となった。

本展のもう一つの特徴は、埼玉県立近代美術館において、遠山記念館所蔵の古美術作品を展示したという点である。竹岡は遠山記念館のコレクションから作品を選び、自らの展示構成に組み込んでいる。これにより、現代美術と古美術が混在するという、特徴ある展示空間が出現した。展示はウォールケースを用い、通常よりも余白を大きく取った。これによって発生した何もないスペースは、ケースそのものを物体として鑑賞者に提示しようという、竹岡の特殊な表現である。



埼玉県立近代美術館での展示風景
(写真提供：埼玉県立近代美術館)

本展開催期間は、夏休みと大きく重複しており、子ども連れの来館者も多く、子ども向けのワークシートも好評であった。また普段はあまり見られない現代美術関係の来館客も多く、そうした方々に文化財建築である遠山邸の魅力を知っていただく良い機会となった。アンケート結果も好評であり、「展示ケース」「空間」といった、本展のキーワードを書いたものも少なくなかった。美術館とは何か、そうした疑問を問いかける竹岡の試みは、極めて良好な成績を納めたといえそうだ。

また日本経済新聞、朝日新聞など、複数の新聞社に紹介記事を掲載していただいた。現代美術に強い『美術手帳』誌には、webサイトで記事を掲載していただいている。また本展覧会の開催にあたっては、芸術文化振興基金、公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団、公益財団法人朝日新聞文化財団からの助成を、ワコウ・ワークス・オブ・アート、JR東日本大宮支社、FM NACK 5の各社の協力を賜った。この場をお借りして謝辞を述べたい。(依田徹)

遠山邸建具2題 長屋門大扉と母屋のガラス戸について

久保木 彰一

今春の4月16日に開催した遠山邸研究会第12回講演会では、宮島建具店社長の高橋利幸氏に「遠山邸の木材と建具の技法」という題で講演をしていただいた。スライドを使った説明に併せて、櫟玉空厚板や組子^{くみこ}の見本、建具の実例まで持ち込まれ、素人にも分かりやすいお話であった。さらに遠山邸を巡って、特徴的な建具の前での詳細なご説明をお聞きした。体験学習しながらに、障子戸を開口部から外して下棧部分を抜くと、外見では知りえない内部構造の細工が目の前に現われ、遠山邸竣工時に建具を担当した建具師藤井茂の高度な技がうかがえた。

遠山邸の素晴らしさを伝えたいとの高橋氏の熱いお気持ちは、本当に感謝に堪えない。改めて木造建築の大工、左官、建具などの仕事が、見かけも大事ながら、見えないところにこそ匠の技を尽くすものなのだ、と再確認した。

遠山邸建設の設計監督を務めた室岡惣七が記した『落成所感』の中で、「口授せられては居りしかど施工するは初めてなりと称する仕法至る所に使用せられ」といっている工法、技法が、いったいどこに施されたのか。木組みや特殊な仕口などが建物を解体しないと分からないのは、残念な限りである。

さて、高橋氏が講演の事前調査で社員の鴨井和宏さんと来館された時の長屋門での話は、講演で触れられなかったので、ご紹介をしたい。大扉の左右の鏡板は、ブックマッチ（木材を2枚に板取りして見開き、木目を左右対称に配置する）にすることが多い、との教示。左右の木目は似ているようでピタッと繋がらないのですがと伝えると、一枚は表裏を替えたのであろうかと、しばらく木表・木裏の違いを確認され、続いて母屋の建具を見て帰られた。

翌日、大扉鏡板の写真4枚を撮って、プリントをいろいろと組み合わせてみると、なんと下図のように左側板を反転して右上に移すと、2枚の板木目が繋がることが分かった。

遠山邸の竣工以来、記録も伝承もないままできた小さな秘密が明かになったかも、と“ほくそ笑む”自分がいた。



(連続部分拡大)



早速、このことを鴨井さんを通じて高橋氏にお伝えした。2、3日して、鴨井さんが講演用の追加スライド撮影のため来館され、鏡板の使い方についての社内での議論を話してくれた。

板の天地を逆さまにして用いるようなことは職人ならばまずやらない。樹が生えていた時の元末をひっくり返した向きで柱や戸を立てたら、自然の理屈に逆らうことになるから。大工や職人でない人が、決めたからこうなったのでは。例えば、総監督をされた遠山元一の弟さん・芳雄さんだったら、こうした方が杢が左右にそろって美しいからこれでいこう、といったかも。

なるほど、建築は専門外ながら、兄から全権を任せられ、趣味もセンスも一流であったという遠山芳雄の決断であったのかも知れない。彼だからこそ不吉という逆柱^{さかばしら}の俗信に臆せず、屋敷の顔になる門扉の見栄を重要視し、証券業を営む仕事から縁起を担ぐ兄元一に黙ってでも、木目の取合わせに大決断を下した。母屋が完成し、庭の造園もすべて整ってから長屋門建設であったから、門扉2枚はまさに画龍点睛、最後の仕上げに他ならなかったはずである。

東京府中産と伝えられる櫟玉空のこの鏡板の寸法は、1枚 縦185cm、横巾110.3cm、厚2.2cmあり、この木取りのできる櫟の原木は直径が2mを越すほどの大樹であったはずである。横2枚巾もの木はありえないから、仮に厚みが2倍以上の厚板であれば木挽きして左右に開くと、ヴァイオリンの裏板のように、木目をブックマッチの左右対称にできる。

だが実際は、長さが2倍の長尺板を真ん中で切って使った。横に疎密のような木目では、左右にスライドさせて並べると疎密・疎密と繰り返す。ところが1枚を180度回転させてみると、疎密・密疎の縞状となり、2枚はシンメトリーに近い落ち着いた木目構図になった。

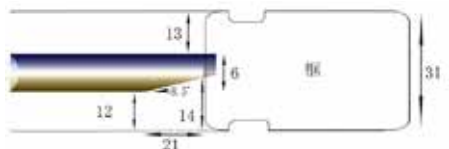
さあ、これから銘木尽くしの始まり、はじまり。

2 題目は、中棟大広間の外の入側廊下^{いりがわ}に立てられたガラス戸について、疑問点とこれまでに調べたことを記しておきたい。

昭和11年(1936)竣工時の『遠山家本宅新築落成記念写真帳』には、廊下を撮ったセピア色の写真と、「硝子戸 檜製本磨面取硝子入」の説明がある。写真には、確かに硝子の四周に透過の違う帯が回っており、現在のガラスが当初のままと知る。



建具断面図
下方が内側
単位mm



我々は大形ガラスに囲まれた現代社会で暮らしていて、無色透明のガラスの存在をほとんど意識することはない。この大形で歪みのないガラスはどこで造られたのか、遠山邸建設の資材注文書、納入書などが一切残っておらず、謎であった。

先輩方から伝え聞いたのは、ガラスはアメリカ製の特注品で、ピッツバークのコーニング社へ寸法を指示して製作させ、船で太平洋を渡り、東京の建具師が戸に仕立てたもの、と。

国産板ガラスの始まりは、明治40年に旭硝子が設立されてからで、ベルギーの手吹円筒法、大正3年にラバース式機械吹円筒法によった。大正7年に日本板硝子も米国のコルバーン法で生産を始めた。昭和3年に旭硝子はフルコール法とピッツバーク法に変換、昭和10年から日本板硝子はロールアウト法で型ガラス・磨きガラスを生産した。昭和になって需要が拡大すると、輸入品ではなく国産ガラスの大量生産で充足できるようになる。ただし、国産の普通ガラスは薄くて小サイズ、しかも、現代であれば、逆にレトロな雰囲気を感じさせると人気の、ゆらめき・歪みが特徴であった。

遠山邸の大判で歪みがなく、平滑、透明度の高いガラスは、当時の日本の技術では製造不可能であり、輸入品としか考えられない。

上述のように、昭和初期の国産ガラス製造は、最

先端の技術力・生産力のあるアメリカから技術導入をしていた。製品の輸入先もアメリカ製の確率が高いということで、コーニング社を調べてみた。1851年創業で、現代も世界最大級のガラス製品メーカーである。温度計管、鉄道信号ガラス、白熱電球ガラス、耐熱ガラスから発展し、現在はガラスパネル、望遠鏡ガラス、光ファイバーを生産する企業である。コーニングジャパン(株)に問い合わせると、創業以来、板ガラスの生産は行なっていないとの回答であった。残念ながら、信憑性ある伝承ではなく、ガラスメーカーを探る手立てを失ってしまった。

参考までだが、1900～1920年代に板ガラス生産に新たな設備や買収を通じて米国最大のメーカーとなったのは、ピッツバークプレートガラス社 Pittsburgh Plate Glass Co.(現PPG Industries)であった。当時は直接コンベアベースのリボン方式(ロールアウト法的一种)で、2本のロールの間に溶けたガラスを直接通して板にした。この技法で模様をプレスしたり、網入りガラスにしない場合は、ガラス表面にローラー跡が残るので平行平面を得るために、表面を研磨する必要があった。この磨き工程が手間と時間が掛かり、磨きガラスの価格を下げられない理由であったという。

もとい、遠山邸で大広間入側の南側3間に柱を立てず、最大巾の4枚ガラス戸を入れたのは、座敷から庭の景色を楽しむために他ならない。座敷境の明障子戸と同寸に揃えて、建具細框^{がまう}だけの大きなガラス面にすれば、パノラマの眺望と、当時の和風建築では想定を超える明るさが得られたはずである。一枚もの、銘木好みの遠山家にとっても、稀なる大きさのガラス戸は自慢の品であったに違いない。それだけに、戦時下の昭和20年、北関東を空爆して南に帰るB29が弾倉に残った爆弾を、邸宅の数キロ先の荒川辺りに落とした被弾後に、ガラス戸すべてを外して蔵にしまった、と伝わっている。

ところで、遠山邸竣工から遡ること37年前の明治32年、東京根岸の長屋でつらい闘病生活を送っていた正岡子規は「寒さうな外の草木やガラス窓」と詠んだ。後輩の高浜虚子から病室の明障子をガラス障子戸に替える贈り物をもらって、もう寒くはない部屋内から庭が楽しめるようになった変化と喜びを句にした。夏目漱石に手紙で知らせている。板ガラス国産化の直前であり、相当に高価な輸入ガラス戸であったろう。昭和になると一気に庶民に普及し始め、防寒、眺望、陽射しのメリットを誰でも享受できる時代となった。日本住宅建築史上の大変化であった。それも、建具の障子紙張りの代わりにガラスを嵌めるといふ、簡単な手間だけでなし遂げたのだ。

日本人は、明り障子を平安時代末に発明して以来明治時代になるまで、住まいの冬の寒さを、ただじっと耐え続けてきたのである。なんと我慢強い国民なのであろうか。

西と縁起物

2017年1月8日(日)～1月29日(日)

酉年にちなみ、鶏をはじめ鳥を描いた絵画や、鳥類モチーフの工芸品を一堂に展示いたします。今年は今尾景年が描いた六曲一双の「群鶏図」(写真 明治時代)を出品し、鶏たちが集う春、秋の風情をお楽しみいただきます。また、古代アンデス、中近東、インドネシア、インドなど様々な時代、地域の土器や染織品に表現されてきた鳥たちも勢揃いします。その土地ならではの鳥への思いに触れながら、お気に入りのラッキーバードを探してみてください。



今尾景年「群鶏図」右隻

【主な出品作品】

岸駒「芭蕉鶏図」江戸時代後期、橋本雅邦「秋草双鶏図」明治時代、佐藤朝山「巢鶏(木彫)」20世紀、「彩画鳥形注口壺」ペルー ナスカ文化(前200～後500年頃)、「鳥形土偶」シリア北部 紀元前2千年紀、「トキ像」エジプト 第26王朝(前664～前525頃)、「鶏・動物文様経絆腰布または肩掛」インドネシア スンバ島 20世紀、「鳥文様ろうけつ染腰布」インドネシア ジャワ島ジョグジャカルタ 20世紀ほか

雛の世界 —日本人形之美と系譜—

2017年2月4日(土)～3月12日(日)

江戸期に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。高さが60cm以上もある大型で豪華な「享保雛」をはじめ、丸顔で愛らしい「次郎左衛門雛(立雛)」、江戸っ子に人気を博し、現代の雛人形のもととなった「古今雛」、まるで象牙で作られているかのように精巧でかつ極小のセルロイド製「御殿雛」、明治天皇、皇后、儀仗兵、女官を表した「明治天皇御影雛」などの変わり雛の他、久保佐四郎や永徳斎、大木平蔵など、名工と呼ばれる作家たちの雛人形を出品致します。他にも嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、郷土人形なども展示致します。併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱいには飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、長女貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたもので、関東風の「段飾り」と、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」の二組で構成されています。日本の人形が持つ美しさと魅力をぜひご堪能下さい。



「次郎左衛門雛(立雛)」(図左)

「遠山家雛壇飾り」(御殿飾り部分、図右)

※雛壇飾りは、2月1日(水)からの公開となります。

※「雛の世界」関連イベント

親子で楽しむワークショップ&ギャラリートークー投扇興遊びと展示解説ー

(共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」)

日時：2017年2月4日(土) 午前10:00~12:00

参加費：入館料のみ

参加対象：小学生と保護者(お子様だけの参加も可能です)

扇を投げて的にあてる、昔のゲーム「投扇興遊び」に挑戦してみませんか。その後は、遠山邸に飾られた遠山家のお雛様や美術館で開催中の「雛の世界」展を見学します。



古今雛 遠山邸二階での特別展示と郷土料理 呉汁を楽しむ会

日時：2017年2月18日(土) 午前11:30~

定員：20名様 参加費：2,500円(入館料、飲食代込み)

担当学芸員による「雛の世界」展及び普段非公開の2階を含めた遠山邸の解説の後、送迎バスにより、地元川島町の郷土料理「呉汁」を



召し上がっていただく企画です。また遠山邸の2階では「古今雛」(江戸時代後期 高さ70cm)を間近でご鑑賞いただく機会も設けました。ご希望の方はお食事の後、館にお帰りいただき、自由見学やお抹茶などをお楽しみいただくこともできます。

お申込み：上記2件とも、電話もしくはメールで予約を受付けます。

TEL 049-297-0007 メール arai@e-kinenkan.com



「雛祭りの日」ガイドツアー

日時：2017年2月25日(土)・2月26日(日)、2月28日(火)~3月3日(金) 各日とも午後1:30~

担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します(所要時間は約1時間30分です)。

投扇興を楽しむ会

日時：2017年2月12日(日) 午前11:00・午後2:00(1日2回開催)

花の美術ー春から夏へー

2017年3月18日(土)~6月11日(日)

遠山記念館の庭園が、花と新緑に包まれるこの時期、美術館でも日本画、陶磁、漆工、世界の染織作品の華麗なる花の造形を楽しんでいただきます。美術館の中は、咲き誇るアートの花園となります。人と花との関わりは太古からですが、生きた花を愛でるに留まらず、絵に描き、花の模様を写した衣服や道具として親しんできました。それらを見れば、創り出した人、かつて使っていた人達と変わらない、華やいだ気分になることでしょう。



「色絵蝶牡丹に鳥文鉢 古九谷」

【主な出品作品】

伝藤原行成「伊予切」、「吉野山蒔絵長硯箱」、「砧青磁牡丹文花生」南宋、「寺院用草花文掛幕」清、「花文様刺繍掛布」インド グジャラート州カッチ 20世紀ほか



谷文晁「花鳥図」

お座敷美術講座 特別編

題：「茶席で見よう！寸松庵色紙」

日時：2017年1月29日(日)

第1回 午後12：20～ 第2回 午後1：20頃～

第3回 午後2：20頃～ (集合は各々20分前)

会場：遠山記念館離れ茶室

定員：各回7名(先着順) 参加費：1,500円(別途入館料)

担当：井上則子(当館学芸員)



「寸松庵色紙」

これまで7回行って参りましたお座敷美術講座ですが、今回は新春展「酉と縁起物」(6P参照)にあわせ、梅香る離れ茶室にて呈茶を楽しみながら、重要文化財の伝紀貫之筆「寸松庵色紙」をご鑑賞いただく特別編です。寒中に春の兆しを感じていただけたらと思います。ふるってご参加ください。

お申込み：ご希望の回と人数、代表の方の住所(郵便番号)、氏名、電話番号をお伝えください(TEL 049-297-0007 またはメール inoue@e-kinenkan.com)。参加可能な方には受講票をお送りします。当日美術館受付に受講票をお出しいただき、入館料とともに参加費をお支払いください。なお作品保護のため本席は暖房が使用できません。また、気象条件により他の作品に替ることもございます。どうぞご留意ください。

遠山記念館 雛祭りの茶会

日時：2017年3月5日(日)

午前11：00～(第一席) 午前11：40～(第二席)

午後1：00～(第三席) 午後1：40～(第四席)

午後2：20～(第五席) 午後3：00～(第六席)

各回とも25名様

会場：遠山邸2階座敷 席料：1,000円(別途入館料)

担当：依田徹(当館学芸員)



第2回「遠山記念館 雛祭りの茶会」を開催致します。普段は公開していない遠山邸2階の数寄屋座敷で、桃の節句にちなんだ趣向で薄茶をお点ていたします。2階は本座敷の他、洋間の応接室や寝室が設けられており、呈茶の後にご見学いただけます。

お申し込み：電話もしくはメールで予約を受付けます(TEL 049-297-0007、メール arai@e-kinenkan.com)。定員に満たなかった場合は、当日のご参加も受付けます。

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を

手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 20

日時：2017年5月3日(水・祝日) 午後1：30～2：30

会場：遠山邸大広間 定員：50名(先着順) 参加費：入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会パート20を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声、また童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。

なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。



お座敷美術講座

題：「涼感を誘う、長板中形」

日時：2017年5月27日(土) 午後1:00～

会場：遠山邸2階座敷 定員：20名(先着順)

参加費：300円(別途入館料) お申込み：TEL 049-297-0007

長板中形とは、江戸時代から伝わる型染の技法の一種。染法は、型紙を使い防染糊を木綿の生地両面に置いて、藍に浸染することにより模様を表しています。講座では、この高度な技術をご紹介します、長板中形の青と白の美しさをご覧ください。



「紗綾地貝合わせ模様着尺」(部分)

ゆかたの着つけ教室

日時：2017年6月4日(日) 午後1:00～ 定員：10名(先着順)

参加費：入館料のみ お申込み：TEL 049-297-0007(締め切り日：6月1日(木))

日本建築の遠山邸の二階でゆかたを着て、和の文化にふれてみませんか。自分で着つけができれば、ゆかたのおしゃれはもっと身近になります。初心者向けの着つけと帯結びをご紹介します。ご参加をお待ちしております。

※ゆかたはこちらで用意いたします(詳しくは、当館へお問い合わせください)。



ゆかたの着付け教室風景

「暮らしと建築の美－遠山邸研究会」の報告とご案内

2016年は、遠山邸研究会・セミナー講演会を2回開催いたしました。各回とも、多くの聴講の方々に参加していただきました。講師の先生お2人にお礼を申し上げます

第12回 講演会 2016年4月16日(土)

題：「遠山邸の材料と建具の技法」 講師：高橋 利幸氏(宮島建具店社長)

数々の文化財や名建築の修理をされている高橋氏から、遠山邸に使われている木材と建具製作の伝統技法について講演をしていただきました。銘木サンプルや、邸内現場での解説を含めての充実の内容でした(4～5Pの学芸員ノートもご覧ください)。



第13回 講演会 2016年9月24日(土)

題：「伝統の畳と遠山邸の表替えについて」 講師：岡田 暁夫氏(岡田本店社長)

2011年に遠山邸1階の座敷と廊下の畳200枚を表替してくださった岡田氏に、畳の歴史と畳の出来るまでの話、匠の技をうかがいました。畳床裏から発見された創建時の畳店屋号貼り紙や畳床裏の仕様、大広間床の間の4尺巾龍鬘畳が中継ぎ表の最高級品であることなど、新知見を紹介してくださいました。また、特別参加の畳職長老でご親戚の岡田知二さんから、戦後早い頃の話、こだわりの仕事について伺うことができました。



【これからの開催予定】

第14回 講演会

日時：2017年4月15日(土) 午後1:30～

題：「遠山邸の技と意匠」 講師：矢ヶ崎 善太郎氏(京都工芸繊維大学准教授)

会場：事務棟地下会議室 定員：80名(先着順) 参加費：300円(別途入館料)

お申込み：電話もしくはメールで予約を受付けます(TEL 049-297-0007、メール tkkk@e-kinenkan.com)。

数寄屋建築研究の第一人者でいらっしゃる矢ヶ崎氏に、遠山邸の書院、数寄屋、茶室の各座敷に見られる個性的な意匠と、そしてそれを作り出した匠の技について語っていただきます。講演を聴けば、自分の眼で実際にそれらを確かめたいこと間違いなし。遠山邸の魅力をたくさん引き出していただきます。※講演後(3時予定)に、学芸員が遠山邸をご案内いたします。

遠山邸2階公開日のお知らせ

4月22日(土)、5月7日(日)、6月3日(土) 午前11:00～午後3:00

中棟2階の洋間応接室・数寄屋座敷を公開いたします。

端午の節句飾り

2017年4月12日(水)～5月7日(日)

遠山邸の大広間次の間にて、遠山家の端午の節句飾りをご覧ください。立派な鎧を中心に、鍾馗や武者人形、金太郎などが凛々しく並びます。まさに階段レビューと言えましょうか。これだけの大物揃い、他では見られない迫力です。



美術館改修のお知らせ

遠山記念館内の美術館は、今井兼次の設計として知られています。竣工は1970年であり、2017年には築47年を迎えます。この度遠山記念館では、展示環境の改善を目的に、美術館内装の改修工事を行います。このため6月11日の展示終了をもって一時美術館を閉館し、それ以降、年内は遠山邸と庭園のみの公開となります。2018年の2月より再度の公開を始める予定であります。生まれ変わった美術館にご期待下さい。

*12月23日(金)～1月5日(木)は休館期間となります。電話およびメールの対応ができません。年末年始にいただいたメールについては、1月6日(金)以降に返信させていただきますので、ご了承ください。

利 用 案 内

- ◇入館料 大人700円 学生500円
中学生以下は無料
(団体20名以上は2割引となります)
- ◇開 館 午前10:00～午後4:30
(入館は4:00まで)
- ◇休 館 月曜日(祝日の場合は開館、翌火曜日)
1/10、1/31、3/14、3/21、
4/11、5/9
- ◇美術館休館(邸宅・庭園のみ公開)
2/1～3、3/15～17、4/25、
6/13～30
- ◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。
URL <http://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅 ●西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第52号

2016年12月 発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館
編集担当 依田 徹

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951